



# とよなか物語

創刊号

▼特集「豊中」への想いを伝えて

クリエイターたちがつむぐ

「とよなか物語」

まちとひととこをきめく

2013  
October  
Vol.1

豊中市



# 落語家 桂吉弥

## 落語家 「桂吉弥」を生んだ 岡町

小学三年生まで東豊中町に住んでいました。父方の祖父母が岡上の町に暮らしていましたが、曾根や服部にも親戚がいて、いとこ同士で遊んだ楽しい思い出があります。服部に住んでいたおじさんには、飛行機を見に連れて行ってもらったことも懐かしい。

両親が共働きだったので、小学一年生から一人でバスに乗って千里中央のスイミングスクールに通っていました。スイミングが終わると、当時千里中央にあった「ロングジョンシルバー」というファーストフード店で食べて帰るのが楽しみ。小一から一人でファーストフード店に行くような、マセたガキだったんです。父親は桜塚高校のラグビー部出身で、小学生チームのコーチをしていたので、日曜日は豊中ラグビースクールの練習にも通っていました。

「豊中」で思い浮かぶのは、人とのつながり。小学一年生のときに担任だった足立先生。フワフワとパーマをかけた髪型とやさしかったことが印象に残っています。小さい頃よく診てもらっていた主治医の水野先生は、テレビっ子だった僕に「そんなにテレビばかり見てたら、目にテレビはめるぞ！」とおこられてびっくりしたことを今も覚えています。どちらの先生も、僕が落語家になったと聞いて、落語会に駆けつけてくれました。

そして、「岡町落語ランド」。アナウンサーから桂枝雀師匠に弟子入りした異色の落語家、桂音也さんがはじめた「音也寄席」がはじまりで、今日まで途切れることなく、40年以上も続いています。

大学生のとき落語の魅力にはまり、後に師匠となる桂吉朝の落語に出会ったあとは毎月情報誌で落語会をチェックして追っかけてしていました。師匠が必ず出演する「岡町落語ランド」は欠かしませんでした。当時は、会場だった岡會堂の畳敷きの部屋にビールケースを並べ、その上に板を置いて高座を作ると



「岡町落語ランド」の  
楽屋口に立って  
師匠が出てくるのをじっと  
待っていました。

いう手作りの落語会でした。弟子入りを決意して最初にお願したのもここで高座のあと。楽屋口に立って師匠が出てくるのをじっと待っていたことを今も忘れません。そのときは断られました。そのあとも落語会のためにお願いし、何度目かに「落語をやっているなら着物くらいたためるやろ。楽屋の手伝いをするか」と言ってもらうことができました。師匠は見習いをさせて僕が本気かどうかを見ようと思ったのです。ここでは、おかまち・まちづくり協議会の人と一緒にビールケースを運んだ思い出があります。

私にとって「岡町落語ランド」は、最初はお客として通い、見習い時代を過ごした大切な場所。私自身も長く世話人を務め、教えきれないくらい高座に出させていただきました。今でも、岡町で落語を演じるのは「我が家に帰ってきた」ような気持ちです。ここが初舞台という落語家は多く、上方の落語家にとっても大切な落語会です。

「岡町落語ランド」には、何十年も通い続けてくれているお客さんがいます。そして、おかまち・まちづくり協議会のみなさんは、長年にわたって裏方を引き受けていただいています。これだけの長い間、地域の落語会を支え続けてくれている人が大勢いるということは本当にスゴイことだと思っています。

駆け出しの頃から見続けてくれていた豊中の人たちのことを思うと、身が引き締まる思いです。

岡町落語ランド  
奇数月第2日曜日の午後2時から市立伝統芸能館で  
開催される落語会。桂吉朝の後、桂吉弥が長く世話  
人を務める。現在は吉朝一門のメンバーが交代で担  
当している。  
落語普及活動支援金 1,500円

お問い合わせ:おかまち・まちづくり協議会  
☎ 06-6852-0632

プロフィール  
桂吉弥(かつらぎちや 落語家)  
大学時代に神戸大学落語研究会に所属、落語会を見に行くうち桂吉朝の落語に出会い、弟子入りを決意。平成6年故 桂吉朝に入門。平成9年ABCお笑い新人グランプリ審査員特別賞、平成17年なにわ芸術祭新人賞、咲くやこの花賞、平成20年第3回繁昌亭大賞、文化庁芸術祭新人賞などを受賞。平成19年NHK連続テレビ小説「ちりとてちん」に徒然草草原役で出演するほか、テレビ、ラジオで複数のレギュラー番組を担当。

## とよなか物語 Contents

- 02・とよなか魅力エッセイ  
落語家「桂吉弥」を生んだ岡町
- 04・「豊中」への想い伝えて  
クリエイターたちがつむぐ  
“とよなか物語”
- 08・インタビュー  
「Nice To Meet You. 庄内」  
写真家 桑島薫さん
- 09・和菓子職人たちに出会う、  
豊中ぶらり歩き
- 12・このまちとともに  
豊中で新時代を拓く  
日本センチュリー交響楽団
- 14・豊中の歴史をひもとく  
高校アメリカンフットボールの  
種が蒔かれた
- 16・とよなかグラフィティ  
「手振り交信」に思いを込めて

**創刊によせて**

豊中は、面積がわずか 36.6km<sup>2</sup> の都市ですが、ここにはこのまちを愛する人々の個性あふれる暮らしや営みがあります。生活を支える豊かな住環境があります。時の移り変わりを見守ってきた多くの史跡があります。

そして、この豊中を舞台に人々が織りなす素敵な物語が大切にしまわれています。

そんな豊中の魅力をたくさんの人に知っていただきたくて、この冊子を創刊しました。冊子をきっかけにして、より多くの出会いが生まれ、新たな “とよなか物語” がはじまることを願っています。

豊中市長 浅利敬一郎



「豊中」への想いを伝えて

クリエイターたちが

# どよなか物語

豊中に暮らし、豊中で生まれ育ったクリエイターたちが、豊中への思いをつづった冊子があります。これは全国に広がった「わたしのマチオモイ帖」プロジェクトに、豊中のまちをテーマに参加した作品です。幼い頃の思い出の場所をたどったり、暮らしの情景を鮮やかに切り取ったりと、まちを見つめるやさしいまなざしが感じられます。そして、作者の「どよなか」と、への愛しい思いが読む人の心をとらえます。そんなクリエイターたちの「どよなか物語」を通して、豊中のまちを見つめます。



おかまち帖  
後藤溶子さん  
(コピーライター)  
後藤鐵郎さん  
(写真家)



庄内帖  
大陽裕美さん(編集者)



新千里東町帖  
柏木ニ美さん(イラストレーター)



ここ原田神社は町の人々の心のよりどころ  
大鳥居から右にのびる旧能勢街道。

手づくり豆腐屋さんでぬくぬくの豆乳いただいて、ほな行きましょか。

## おっとり落ち着く岡の町

後藤鐵郎さん(写真家)  
後藤溶子さん(コピーライター)

おかまち帖



### おっとり落ち着く

茅葺き屋根のお屋敷や旧街道沿いに続く昔ながらの商店街など、ちよつと懐かしい雰囲気のみちなみをやさしく見つけた「おかまち帖」。企業広告に長く携わってきた写真家の後藤鐵郎さんと妻の溶子さんが二人の思いを重ねました。人のぬくもり、息遣いが感じられるものを大切に思う後藤夫妻は、岡町周辺のこうした雰囲気が入り込んで転居を決めました。今から20年前のことです。

ちよつと上の子どもが小学校にあがるまで、こんなまちで子どもを育てたいと思ったそうです。

### 神社でつながる岡町商店街と桜塚商店街

「岡町の商店街は気を遣わなくてもよいお店が多いし、古くからある喫茶店は、まちの人の憩いの場所」と溶子さん。大切な洋服のシミ抜きは商店街のクリーニング屋さんなら安心して頼めるし、原田神社前のお豆腐屋さんでも大のお気に入りです。

「明治から続く菓子店なんかも、今では見かけなくなった昔ながらの店構えですね」と鐵郎さん。行きつけの床屋さんとのコミュニケーションを楽しんでいるそうです。

### くねくね広がる住宅街の道

溶子さんは「岡町の魅力は路地がたくさん残っていること」と言います。歩くたびに発見があるそうです。古いお家の裏に隠れていて、これまで気づかなかった小さな畑に出会って驚いたり、懐かしい風情の畳屋さんからは職人さんの作業する音が静かな住宅街に心地よく響いていたり、飽きることはないそう。

「きれいでまっすぐな道だけではないのは、まちのゆとりだと思えます。路地は無駄なようだけど、まちの懐の深さみたいなものを感じます」。

古くからの味わいのあるまちでありながら、よそで育った人も違和感なく受け入れてもらえて、居心地がいいというのが二人に共通する意見。鐵郎さんは、「これからもレンズを通して、このまちを見つめていきたい」と話します。



桜塚商店街に明治からつづくお菓子屋さん。元気の秋けつは、夫婦円満と、お客さんとの会話ですって。



何代もつづいた庄屋さんのおうちをギャラリーに。大きな楠が迎えてくれます。



### 「わたしのマチオモイ帖」プロジェクトとは

はじまりは、ひとりの女性クリエイターが自分を育ててくれた町を、自分の言葉で伝えた小冊子を作ったこと。その思いが広がり、2011年に34組のクリエイターが参加する展覧会として発表されました。2012年に東京と大阪で開催された特別展「my home town わたしのマチオモイ帖」では約340帖のマチオモイ帖が集まり、2013年には日本全国13地域、22カ所で開催されるに当たっています。





この公園は  
これからもずっと  
このままできてほしいなあ

柏木二美さん(イラストレーター)

小さい頃よく遊んでいた公園は今でもあの頃のままで時々ここに来ると癒される……わたしのお気に入りのお気に入りの公園



ここ来ると  
いつも時が止まったような

新千里東町で生まれ育った柏木二美さんは、大好きな千里東町公園をみんなに知ってもらいたい、新千里東町帖を作りました。分身のかわいいぬいぐるみが、木立の合間に、池のほとりにと茶しげに駆け回り、公園の魅力が語ってくれています。

「東町公園は、小学生の頃、毎日のように家族と一緒に犬の散歩に出かけたり、ザリガニを釣ったりしてよく遊んだ場所。沼にはまって泣いたことや、近くに住む外国人から話しかけられ恥ずかしかったことなど、懐かしい思い出が浮かんできます」。

今もよく行くこの公園の中では、千里中央側から来て階段を下りたところの風景が一番のお気に入り。「どこかの外国にいるみたい。平日の昼間は訪れる人が少ないので、静寂さがとても素敵な雰囲気を感じています。見上げる木々は美しく、高原の空気のような清々しさも感じます」。

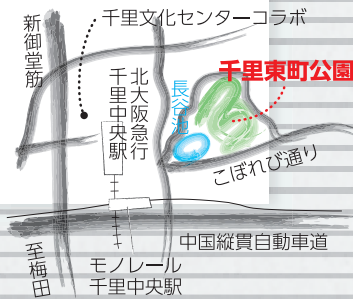


森のむこうに見える池がまるで湖みたいな存在感



この森が永遠に存在することを願いながら

ここから見上げる森が美しすぎてしばらく森林浴で癒される……この森が永遠に存在することを願いながら



## まちのおと

大陽裕美さん(編集者)



庄内帖

まいどーいっしょー！

「相変わらず駅前には自転車が大量に並んでいるし、道幅の狭い商店街では自転車が結構なスピードですり抜けていくし……でもやっぱり憎めない」。

タウン誌の編集者として活躍する大陽裕美さんは、大好きな庄内の魅力をこのまちならではの「おと」を通して紹介しました。

「子どもの頃、母親は毎日豊南市場に買い物に行っていました。買い物と言えば野菜は八百屋で、魚は魚屋で買うことが当たり前だったんです。煮つけにするからさばいといで！」おばあちゃん元気にしてる？「にぎやかな声が飛び交う市場の様子を見て、子ども心にもワクワクしたのを覚えています。お味噌屋さんで、味噌樽にきれいに盛り上げてあるお味噌を触りたくて仕方なかったです」と笑います。

夕方になると、家の近所を自転車で売りに回る豆腐屋のおじさんのランランという鐘の音。おじさんは今も元気だそうで、それがとっついてもうれしいこと。

今バナナ買つとかなえらいことなるで



うたい文句が  
なんだか楽しい。

じゃり道 じゃりじゃり

昭和の頃から人口密集地だった庄内には、古いアパートや文化住宅、じゃり道が、今でも残っている。じゃり道でこけるとどれだけ悲惨か……庄内で育った子どもは、身をもって知っている。



## じゃりじゃり

家にお風呂はあったけれど、家族そろってよく銭湯に行ったことも思い出のひとつ。冬至のゆず風呂やお正月の一番風呂は銭湯に行くこと決めていて、祖父母が大張り切りで家族みんなを連れて行ってくれました。「菖蒲湯のときには葉っぱを頭に巻いて遊んだり、風呂あがりには、うどんやアイスクリームを食べさせてもらったり」。かき湯をするこことやタオルを湯船につけないなど、銭湯の作法も祖母から教わったそうです。

帰り道、家族で歩いたじゃり道のじゃりじゃりという音は、大陽さんには今でも懐かしく、愛しい音。

ゴオゴオゴオ



初めてここに来る人はこの轟音にびっくりするらしいが、町の人にとって、トイレでつまみを回せば水がジャーつと流れるのと同じくらい、生活に染み込んでいる。





## 「Nice To Meet You. 庄内」

写真家 桑島薫さん (くわじま・かおる)



平成24年(2012)11月、古民家を改装して開業した「ギャラリー カフェぐるり」(庄内西町)。このカフェのオープニング記念に、写真家・桑島薫さんが写真展「Nice To Meet You.」を開きました。レンズにとらえた庄内の魅力について、桑島さんに語っていただきました。

写真家。1979年香川県生まれ。サンフランシスコにて写真を学び、帰国後写真家として活動開始。大阪を拠点に、作家活動を行いつつ、広告・雑誌での撮影を手がける。



庄内には写真展の撮影のために初めて訪れました。「いつも駅前市場や商店街の活気がクローズアップされるけど、ほんとうは住む人が楽しく、人々の暮らしが素敵なまち。そんなまちのよさを伝えてほしい」。私の写真に興味を持ってもらっているカフェのスタッフからの依頼だったので、初めての庄内の印象は、周りから聞いていた通り、にぎやかなまち。頭の上を飛ぶ飛行機にもびつくり。でも、何度もまちを歩いていくうちに、暮らしを大切にしている人々の日常を感じる風景があちこちにあることに気づきました。家の前に手入れの行き届いた植木鉢をたくさん飾るなど、み

んなで心地よく暮らすための配慮が伝わってきました。夕方になると銭湯にはたくさんのお客さん。湯船につかっただけの楽しそうな話が浮かびます。ふと見上げると、洗濯物干しのペランダに寝転がって飛行機を写しているステテコ姿のおじさん。飛行機が通り過ぎると家に入って、次の飛行機が飛んでくる時間になるとまたペランダに出てきて写真を撮っています。暮らしの楽しみ方を教えられたような気がして、しばらく見ていました。夕焼けに染まったまちに漂うおもしろい。いつも人の気配がして、何かほっとする安心感に包まれます。写真展を観てくれた人の中には、東

日本大震災で被害を受けて庄内に住むようになった人がいます。周囲に知り合いもおらず、やっていけないかなと不安に思っていたけど、写真を見て、地元の人たちの暮らしが垣間見えて、距離がぐっと近くなったと感想を寄せられました。まちの景色の見え方で、人の心が軽くなるんだと知りました。写真展のタイトルは、初めて訪れ撮影するこのまちに対して「はじめまして、どうぞよろしく」という自分の気持ちを込めて写真を撮っていたことを表しました。

# 和菓子職人たちに出会う、豊中ぶらり歩き

遠い昔から、暮らしに彩りを添え、私たちの生活とともにある和菓子。豊中には、和菓子づくりを通して地域の元気づくりにも「役買おう」と積極的なお店がたくさんあります。そんな和菓子職人たちに出会う豊中ぶらり歩きです。



**豊中ぶらり歩き・服部**  
レトロな雰囲気が漂う服部阪急商店街の南側入口には服部ハッピー(写真)。駅周辺にはいくつもの商店街が並び、駅名にもなる服部天神宮や大阪最古の能舞台のある住吉神社は駅東側。



## 出会う、

「寡黙に仕事をする、90歳現役和菓子職人」  
御菓子司 富貴屋(服部西町)  
山下義則さん

同じ村の出身が縁でこの道に

豊中には60年以上にわたって、和菓子づくりに打ち込む職人がいます。大正12年生まれの山下義則さん。店名の由来でもある和歌山県富貴村出身で、尋常高等小学校を卒業して大阪市内で働いた後、陸軍に徴兵され中国東北部へ。いったん田舎に戻ったものの「大阪での生活に慣れて再び大阪へ。店主が同じ村出身の和菓子店を手伝うようになったのがこの道に入ったきっかけです。昔は同郷のよしみで働かせてもらうのは多かったんや」。50年ほど前に服部阪急商店街ができたのと同じ時に店を構えました。

昨日よりおいしいものを

今も、週に二、三度は早朝から和菓子の命ともいえるあんこを炊きます。「あんこは生き物。風味や甘味、色つやなど、出来上がりは毎回違う。今日炊き上げるものは、昨日よりおいしいあんこにしたい。そう考えて、気がつけば60年も経ちましたか」と笑う山下さん。大きな銅鍋をきれいに洗い上げるまで、すべて一人で作業します。かなりの重労働ですが、「手伝う言っても触らせてくれません。自分でやらんと気がすまんのです」と、息子で二代目の順朗さん。

**「白球もなか」**  
「豊中が高校野球発祥の地であることをもっとアピールしたい!」と順朗さんが発案。野球ボールをモチーフにした皮に合わせるあんこは、もちろん義則さんのお手製。

饅頭づくりは二人のコンビネーション。あんこを生地で包む順朗さん、饅頭を蒸すのは義則さんと、二人の動きには無駄がありません。90歳とは思えない軽やかな身のこなしで、義則さんは蒸し上がったせいろから次々と饅頭を並べます。

休みには一万歩あるく

妻に先立たれてからは一人暮らし。食事づくり以外は掃除、洗濯なんでも自分でやります。週一回の休みには必ず妻の墓参り。その行き帰り、あちこちを回って一万歩はあるくと言います。義則さんによれば、かつての商店街は、人であふれ、向かいの店が見えないときも多かったとのこと。「時代が移るのは仕方がない。でも、一人でも多くのこの商店街に来てもらいたい。自分がつくった和菓子を食べてもらいたい。だから、自分の「老後」はまだまだ先」。



豊中銘菓の創作に、地域イベントへの協力。地域とのかかわり方はさまざまです。

菓銘に込められた地域への想い

和菓子には、短歌や俳句、地域の歴史などに由来する「菓銘」がつけられています。豊中ならではの菓銘を探すのも、和菓子の楽しみ方のひとつ。

長くお茶席のお菓子を手掛けてきた「御菓子司 京屋」(浜)の堀本安盛さんは、豊中銘菓の創作にも力を注いできました。高校野球発祥の地にちなんだ「白球もなか」や「白球さふれ」のほか、「天竺川」は、西願寺橋近くのサクラとユキヤナギが咲き誇る、自らのお気に入りの景色を表現したもので、「待兼の鏡」では、古今和歌集に詠まれた古の待兼山の情景に思いを馳せました。

三代にわたり76年続く「御菓子司 杵屋末広」(南桜塚)の大賀克彦さんは、店の近くにある大塚古墳からイメージをふくらませ、古代の豊中人がメロディを奏でて踊る様子を表現したユニークな「踊るはにわ」を創作。合掌最中」は日本民家集落博物館にある飛騨白川の合掌造りにちなんだ銘菓です。

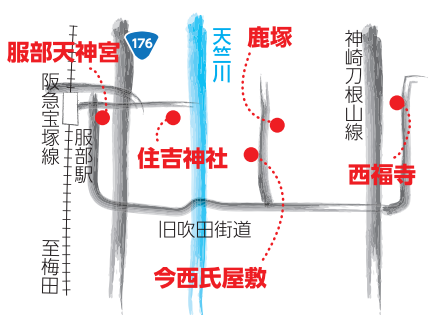
「まちのあちこちを歩いたり、地域の歴史に思いを馳せることは楽しい。先人たちがどんなことに取り組み、何に悩んできたのか。そんな中で新しい和菓子のイメージが浮かぶことも多いんです」と大賀さん。



【合掌最中】



【待兼の鏡】



豊中ぶらり歩き

小曾根

吹田へと抜ける旧吹田街道沿いには、往時の面影を残す建物やお寺などが点在。西福寺には、江戸時代の有名な画家・伊藤若冲の仙人掌群鶏図のふすま絵が残されています。春日大社南郷目代の今西氏屋敷(写真)や鹿塚なども同街道近くです。

地域に寄り添って

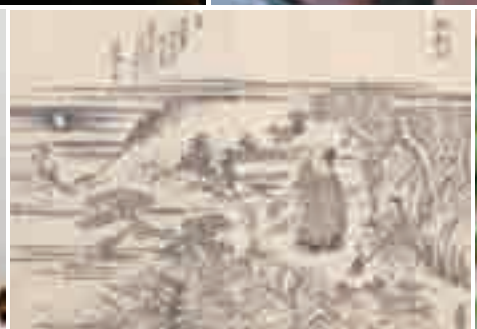
和菓子は、お花見やお月見といった四季折々の行事や、人生の節目の祝い事などに欠かせないもの。「御菓子司 福寿堂」(春日町)の中西造さんは、「和菓子をより深く味わっていただくために、慶事などの由来やしきたりなどについてもお客様にお伝えできればと話します。先日は、赤飯や白蒸しをいつお出しするのかといった相談もあったそうです。

ほかにも、まだまだたくさんの豊中銘菓。

マチカネワニのイラストがかわいい「マチカネワニどら焼き」(津の国屋 曾根東町)や服部緑地を表現した「緑地苑」(白扇 服部元町)、忍法寺の力石の逸話をモチーフにした力石饅頭(由喜 服部南町)、豊中の「豊」と能勢街道が豊かになることをかけて名づけた「豊焼」とよき」(亀甲堂 中桜塚)など。みなさんもご近所の和菓子屋さんで、地元銘菓を探してみたいかがでしょうか。



堀本安盛さん (中央)



中西造さん

豊中ぶらり歩き

庄内

豊南市場や商店街が並ぶ商売のまち・庄内。その周辺には史跡や神社等が点在しています。100年にわたって地域を見守る庄内神社(写真は人々の憩いの場、秋祭りには多くの人で賑わいます。国道176号線との交差にある阪急電鉄の牛立鉄橋は、昭和10年に造られた市内初の高架橋。



豊中ぶらり歩き

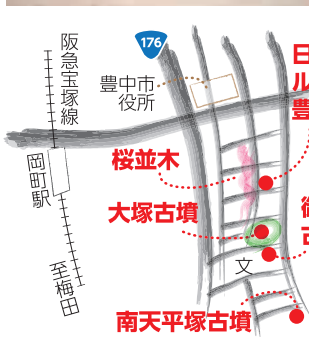
蛭池

蛭池駅西側には、ソーシャルビジネスの起業家をサポートするとよなか起業・チャレンジセンター。その入口には江戸時代の大名青木氏の陣屋跡の碑(写真)があります。野球の名付け親の中馬庚(ちゅうま かのえ)さんのお墓があるのは、駅北東の圓満寺。刀根山病院の東側には駅名の由来となった蛭ヶ池が。

豊中ぶらり歩き

南桜塚

地域のシンボルとなっている大塚古墳(写真)ほか、御獅子塚古墳、南天平塚古墳と、実は南桜塚は古墳のまち。近くの桜塚墓地には見事な桜並木。隠れた春の名所です。周囲には、日本福音ルーテル豊中教会の小さな赤い三角屋根が。隣接するのは、ヴォーリス最晩年の牧師館。



和菓子でまちを元気に

お菓子をまちを元気にしようと平成23年からはじまった「豊中おやつ宣言」の取り組みでは、多くの和菓子店が参加しました。「御菓子司 照月堂」(蛭池中町)の辰巳和彦さんもその一人。小学校の卒業文集に「和菓子職人になる」と書いたほどの根っからの職人。地元小学生たちに団子づくりを体験してもらったり、地域イベントでの実演も快く引き受けたりと、自分の技を地域に役立てることを願っています。



このまちとともに

# —より良い演奏をお届けしたいと、ひたむきに— 豊中で新時代を拓く日本センチュリー交響楽団



「演奏者の自由な発想を大切にすることがこの楽団の良さ」と高橋さん。

## オーケストラの舞台裏

演奏を陰で支えているのがステージ・マネージャー。山口明洋さんは、ステージ上の配置図面の設計から大型楽器の搬入や譜面台の位置合わせにいたるまで、演奏会の舞台に関するすべてを受け持っています。「ステージのセッティングは、演奏する作品によるほか、ホールの特徴や形状によっても変わります。舞台の制約に即応しながら、演奏者たちが演奏しやすいように、そして、お客さまにより良い演奏



服部緑地の木立に囲まれたセンチュリー・オーケストラハウス。平成元年(1989)の創立以来、日本センチュリー交響楽団はこの練習場を活動の拠点として、豊かな音楽創造を国内外で展開しています。

55人からなる、ほどよい人数で生み出される絶妙な音色が多くのファンを惹きつけ、楽団員同士の深い信頼関係も相まって、楽団の奏でる緻密なアンサンブルは高い評価を得ています。

演奏を支える楽団員の皆さんを通して、楽団の魅力を紹介します。



### 団員一人ひとりがめざす高み

「演奏家にとどまらず、音楽家でありたい」と話すのは、バス・トロンボーン奏者の笠野望さん。古いものでは何百年も前に作曲された作品を再現するクラシック音楽。笠野さんはつねに、演奏する曲の歴史的背景を調べ、作曲家の思いへの理解を深めています。また、古い時代の作品を演奏する際には、作曲当時のトロンボーンの音色を想像しながら音を創り出します。演奏の技術を磨くだけでなく、作品に固有の「音楽世界」を大切にすることで、演奏がより説得力を備えたものになると考えています。

副首席第2ヴァイオリン奏者の高橋宗久さんは、「自分の弾いた音をもう一度聴きたい、そう思ってもらえるような音楽を届けたい」と語ります。そのため、毎日の練習は欠かせません。ヴァイオリ

## 地域に愛され、 全国に羽ばたく

が届くよう心を配っています」。パーソナル・マネージャーとして、必要に応じて外部の演奏家の手配をしたり、楽団員のサポートを担当するのは大中一己さん。このオーケストラでクラリネットを演奏してきましたが、先ごろ定年を迎え活躍の場を移しました。「楽団員たちは、互いに切磋琢磨しながら、本当にひたむきに音楽に向き合っています」。そんな楽団員がベストの状態に演奏に臨めるよう、楽団員の心身のコンディションに細心の注意を払い、公私にわたってさまざまな相談に乗るなど楽団員を温かく見守り、支えます。



山口明洋さん左

大中一己さん

望月正樹さんは、楽団長として音楽面の運営全般を取り仕切ります。「オーケストラを取り巻く状況は厳しいが、新たな試みにも挑戦し、前に進みたい」と話します。昨年度初めて、豊中市とともに取り組んだ「豊中まちなかクラシック」もそうした挑戦のひとつ。

「豊中は、文化芸術への市民の意識が高いまち。市内の寺院や教会など歴史的建造物の厚重な空間の魅力を二層引き立て、楽団員たちの質の高い演奏をぜひ体感してください。また、これをきっかけに、楽団員全員が創り出す定期演奏会の魅力にもふれていただければと語ります。

「豊中の豊かな文化を象徴するオーケストラとして、長く市民に愛されるところにも、今後は、全国各地のコンサートホールとの関係も深め、各地の皆様にも大切に思ってもらえるような楽団でありたい」。望月さんは楽団の将来をこのように見据えます。



望月正樹さん

楽団は数々の地域貢献活動にも取り組んでいます。



今年18回目を迎えた「星空ファミリーコンサート」は、小さな子ども連れでも気兼ねなく楽しめる好評。



「タッチ・ジ・オーケストラ」は子ども対象の体験型音楽ワークショップ。最初は半信半疑の顔つきが、やがて楽器への興味に。子どもたちの目が輝いていきます。



「演奏には人柄が出る」と笠野さん。人としての成長も音楽のために。



の弦との角度や強弱を操る弓の動きと、弦を押さえる指づかいなど、理想の音色を求め、その音を体が覚えるまで、何度も繰り返します。気がつけば同じ箇所を何時間も弾き続けていたこともあるそうです。

演奏を通じてコミュニケーションに音楽の持つ力を感じ、忘れ得ぬ音楽を演奏会ですべて奏でられるよう、演奏者として準備に万全を尽くしたいと高橋さんも自らの演奏の糧としているそうです。



(右) 浅利敬一郎市長  
(左) 水野武夫理事長

## 「とよなかを音楽いっぱい」

市と日本センチュリー交響楽団は、平成24年(2012)9月28日に「音楽あふれるまちの推進に関する協定」を締結。同楽団主催のコンサートに市民を無料で招待する「豊中市民デー」を設けるなど、気軽に音楽にふれられる機会づくりに取り組んでいます。



## 高校アメリカンフットボールの種が蒔かれた

「地上スポーツの最終型」と称され、パワー、スピード、戦略とあらゆるスポーツの特徴が盛り込まれた「アメリカンフットボール」。日本の高校アメリカンフットボールの歴史は、この豊中からはじまりました。

### 「レッツプレイフットボール！」

戦後まもない時期に、米進駐軍は日本にタッチフットボールを普及するため、旧制中学校に指導に回りました。その先駆けとして旧制池田中学(現・府立池田高校)とともに選ばれたのが旧制豊中中学(現・府立豊中高校)です。指導したのは日系二世の米軍将校、

### 三つの「日本初」

ピーター岡田氏。「みなさん、フットボールで遊びましょう！」の掛け声で練習がはじまりました。2か月後の昭和21年(1946)12月28日には、我が国初の「中等学校米式蹴球試合」が池田中学との間で行なわれ、新聞やラジオで報道されるなど注目を集めました。

ともにNFLヨーロッパに参戦し、日本のアメリカンフットボールの新たな扉を開きました。

### 伝統あるクラブのOBたち

「当時は、防具もヘルメットもなしで、古い綿をつめた手製のすね当てをつけてるくらいでした。ユニフォームもそれぞれ長袖シャツを持ち寄って黒色に染めて作りしました(山本泰男さん・1955年卒業OB会ホームページ管理人)。山本さんの一番の思い出は、三年生の夏、滋賀県まで泊まりがけで行った近畿大会でブロック優勝したこと。

社会人になってからは勤務先のテレビ局記念事業として、アメリカの大学強豪チームを関西に初めて招聘するなど、アメフトの日本での普及発展に貢献されました。  
「大学などに人材を多く輩出していることに加え、OBたちはアメフトで学んだ



撮影:鈴森仁氏(豊高OB)

豊中高校ロードランナーズ



写真提供:豊中高校アメフト部OB会

昭和22年に開催された第1回甲子園パウルの前座試合でも池田中学と対戦。14-0で快勝

経験を仕事などで生かし、社会人として活躍していることは誇りです(角森博史さん・1988年卒業・OB会会長。角森さんはアメフトは運動能力だけでは勝てない競技と言います。「テープが擦り切れるまでビデオで対戦校の過去の試合を見てプレーを分析。そこから予測を立てて戦略を練っていました。練習よりもミーティングに費やす時間のほうがずっと長かった」。この経験は仕事をやるようになって非常に役立つたそうです。

園高校(宮山町)は、これまで何度も関西高等学校選手権の優勝を経験するほか、平成3年(1991)には第22回クリスマスボウルを制し、全国の頂点に立ちました。それでも高校から初めて取り組む部員がほとんどで、日々の練習によってこうした成果を勝ち取ってきました。アメフトは、一人ひとりの長所を最大限活かせるスポーツ。選手たちは自分の役割に誇りをもって、毎日、真剣にアメフトと向き合っています。こうした選手たちの努力が報われるよう、全員が一丸となって挑戦を続けます」とチームを率いる富田監督。

### 豊中から羽ばたく

今年8月には関西初となる市町村単位の協会「豊中市アメリカンフットボール協会」が設立されました。小学生から楽しめるフラッグフットボールの普及などでアメフトの裾野を広げることがめざされています。  
市内の小学校では、今年2月に27チームが参加して、第2回小学生フラッグフットボール豊中大会が開催されるなど、発祥の地・豊中から育つ将来の選手たちの活躍が今からとても楽しみです。

### 発祥の地・豊中から新たな歴史が

大阪国際空港の周辺緑地整備の一環として、現在整備が進められている(仮称)豊中市立ふれあい緑地多目的広場(利倉東2丁目)は、全面天然芝で、アメリカンフットボールやサッカー、ラグビーの公式戦に使用できる本格的なグラウンドです。観客席は300席で、平成26年(2014)4月に供用開始予定です。高校スポーツ発祥の地・豊中から、新たな歴史がはじまります。



### 記念碑に刻まれたメッセージ

「不幸な戦争が終わり、それに続く数々の混乱のなかで、私は高校生に生きる活力を与えるため、1946年10月1日、この豊中に「タッチフットボール」の種を蒔いた。これが日本の高校アメリカンフットボールの発祥となった。ピーター・K・オカダ(豊中高校アメリカンフットボール部創部50周年記念碑に刻まれたメッセージ)

写真提供:箕面自由学園高校



箕面自由学園高校ゴールデンベアーズ

### 全国制覇をめざす 強豪・箕面自由学園高校

市内には、関西の高校アメフト界を引っ張る強豪校があります。箕面自由学



撮影:鈴森仁氏(豊高OB)



撮影:鈴森仁氏(豊高OB)

撮影:鈴森仁氏(豊高OB)



# とよなか グラフィティ

## 「手振り交信」に思いを込めて

毎日、多くの人々を乗せて飛行機が発着する大阪国際空港。その離着陸の様子を間近で見られる空港沿いのスポットには、週末になるとたくさんの方が訪れます。そんな中に、毎週末、運航の安全を願い、パイロットとの手振り交信を続ける人がいます。

飛行機に手を振る小川さん(右)



第一便が飛び立つ午前7時過ぎから午前9時頃までは朝のラッシュ時。離陸する飛行機が次々とB滑走路に移動します。その誘導路近くの走井2丁目17番の一角に、小川悟さん(69歳)の姿があります。小川さんは航行の安全と乗客の無事を祈りながら、目の前をゆっくり通り過ぎる飛行機に手を振ります。それに応えて、操縦席から手をあげるキャプテン。この「手振り交信」を小川さんは毎週末、欠かさず続けています。

今年の3月、そんな小川さんに思わぬ贈り物が届きました。全日本空輸株式会社の運航乗務員有志一同からの感謝状です。乗務員自らその場所へ出向き、直接小川さんに手渡しました。そこには、小川さんへの感謝の思いと、小川さんの応援を励みとして安全への責任を改めて心に誓うとする決意が込められていました。

「あんなに大きな物体が空を飛ぶこと自体がスゴイことだし、それを操縦するパイロットはもっとスゴイ。初めて飛行機に乗った時の感動は今も忘れません。乗客に安全で楽しい空の旅をプレゼントして下さることを願うとともに、世界の空で活躍されることを心から応援しています」。

たくさんの人の思いを乗せ、今日もこの豊中から飛行機が飛び立ちます。

手をあげて迎えるキャプテン



豪快な水しぶきをあげて飛び立つ姿は雨の日ならではの思い出



滑走路に向かう機と離陸する機が交差する瞬間



発行 平成 25 年 (2013) 10 月  
〒561-8501  
大阪府豊中市中桜塚 3 丁目 1 番 1 号  
豊中市政策企画部都市活力創造室  
☎ 06-6858-2863